
餅

ぼーず平野

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

餅

【Nコード】

N0253Q

【作者名】

ぼーず平野

【あらすじ】

一人暮らしをする頑固な老人の話。きつとどこの街にでもこういう人はいます。

老人は怒りつばいことで知られていた。

老人が役場に勤めていたときは、鬼の局長として職員から恐れられた。退官後の天下り先では阿修羅王と陰口を叩かれた。やがて市会選挙に打って出たときは、対立候補の態度が不遜で無礼だという理由から、当選のあかつきにはその男を庁舎のてっぺんから逆さに吊るすと演説して、物議を醸した。

老人にはふたりの息子があつた。

長男は老人と違って無口で忍耐のある男だった。物心ついてからは親の世話にならずに何でもよくできた。老人は元来冷淡な人間であつたから、こういう手間のかからない長男を好んだ。しかし中学を卒業して、いよいよ勤めに出るといつある日、親にも告げずにどこかへ出奔してしまった。以来、一度も戻らない。今も生きているのかどうかさえ判らない。

次男は青白い顔をして、子供の頃からいつも女と遊んでいる男だった。名も知らない学校に補欠ではあったが、元来勉強の嫌いな性質だから、講義にも出ずに毎日長い髪を掻きながらぶらぶらしていた。到底卒業の見込みはないと思われたある日、店を出したいから金を貸してくれと云ってきた。どんな店だと問うと、女給を置いて酒を飲ませるようなところだと答えたから、老人は次男を即座に勘当した。

その三年後に、細君が病院で息を引きとつた。気づいたときには全身が病に冒されていて、手の施しようもなかった。細君は臨終のきわに病床から細い指で夫を招いて、こうやって私が先に死ぬのはあなたの激しい性格に永年耐え忍んできたからで、まったくあなたの所為に違いない、大変悔しいと云い残した。

老人は起きているあいだ、始終何かに対して立腹していた。立腹の材料がないときには、材料がないことに対して腹を立てた。そし

て以前の部下や後輩を自宅に呼びつけて、説教を垂れるのが好きであつた。もつとも、呼びつけられる中には老人よりもずっと出世して、助役になっている者や、中には代議士になっている者もいた。しかし、彼は興に乗ってくると、とことん相手を罵倒せねば気がすまなかつた。

「自分の型をつくれ。そしてそれを自ら破壊せよ。矛盾を超越したときに何かが生まれるのだ」

もうよほど偉くなつた後輩に粗末な手料理をつつかせながら、老人は誰に対しても同じような内容の話を、二三時間しゃべり続けた。老人は禅にかぶれたことはなかつたが、若い頃に茶道をかじつたことがあつた。老人の関係する者たちのあいだで、この説教を知らない者はなかつた。誰かが呼びつけられたと聞くと、「そらまた例の修破離だ」と囃したてるほどだつた。

老人は朝五時より遅く目覚めたことはなかつた。日の出まで寝ている者は愚民であると信じていた。彼は起きるとまず上厠して顔を洗い、むやみに散歩することを近ごろの日課としていた。もつとも、当人は散歩などという気安い言葉を使わず、修練と号して木刀を片手にそこいらを歩きまわつた。そうして手当たり次第に、なにやら訳のわからないものを叩きのめしたり、やつつけたりして帰つてきた。

あるときは、路上に並べた朝顔の鉢が通行の支障になるというので、十あまりあつた素焼きの鉢を端から叩き割つて帰つてきた。老人は頑愚なる正義派であつたから、目に触れるものが曲がつているのさえ許すことができなかった。鉢を割られた家では、おかしい人間と関わつては大変だというので、この後は植物を手にかけることをやめてしまった。しかし、朝顔に毎日水をやって日記をつけていた子供は、大層悲しんだという。

またあるときは、近隣の蕎麦屋が飼っている犬に制裁を加えて騒動を起こした。蕎麦屋のあるじは毛のない頭から湯気をあげながら、血相を変えて怒鳴り込んできた。罪もない犬を突然木刀で殴るとは

なんだ、損害賠償だと云った。ところが老人は、蕎麦屋のくせに畜犬を飼育するとは衛生上げしからんという云い分を楯に、あるじを玄關から追い返した。

だから道で老人を見かけると、近隣の者はわざわざ避けて通った。誰も老人の家に寄りつかなかった。どの家でも、かの年寄りに近寄るべカラズなどということが、親から子へ里話のように語られていた。

老人は無論、己の身からでた錆などということを露ほども考えなかった。老人の頭の中では、徹頭徹尾世間がけしからなのであって、正すべきは世の中でなければならなかった。老人にとって老人の生きかたは規範的であり道德的であり、万人より師と仰がれるはずのものであった。いや、それよりも何よりも、まず自分が世間からそのような取りあつかいを受けているということさえ、老人はほとんど無理解であった。

朝夕めつきりと冷え込むことが続いたある日、老人は庭の梅檀の実が秋時雨に濡れて黄色く光っているのを見て、ふと座敷に火鉢を出しておこうと思いたった。この火鉢は、山水を染めつけたひと抱えもある大きな伊万里である。局長の時代に誰かが置いていったのだが、誰が置いていったのかは覚えていない。おおかた出入りの業者だろうが、残念なことに顔も名前も思いだせない。業者はたしかに、偉い役人に顔を売ろうと付け届けをするのである。しかしせっかく気を遣い金を使っても、このような老人にかかつてはなんの役にもたない。

とにかくこの火鉢は、例年の今ごろは座敷の片隅に寄せてあるのだったが、今年は中元の挨拶に来た局長のSが、もう暑いから片づけましよう云って部下のKと二人でわざわざ裏手の蔵まで運び入れた。だから老人一人の腕で運ぶことは些か難しいに違いなかった。しかし老人は、狭い蔵の中で懷手をしたまましばらく火鉢を睨んでいたが、ちよいと持ち上げてみようという気になった。そして、

えいと手をかけた刹那、まだ底が動きもしないのに腰をどうかしてしまった。老人はそのまま這うようにして母屋に戻った。それから一週間ばかり、老人は這うようにして飯をつくり、這うようにして廁へ通った。

ある宵、老人は実のない汁と香の物ばかりの貧相な膳のうえを虚ろに眺めたまま、日ごろの修練の不足がこのような事態を招いたのだと分析した。そもそも鍛え方が甘いのだと考えた。そこで老人は、ようよう歩けるようになったあくる日から、竹刀を杖代わりにして、幾分直りかけた腰に鞭打って以前にも増してやみくもにそこいらを歩き回った。

「なに、こんなものはすぐに治るのだ」

老人の考えでは、あと半月もすれば修練の成果が実って、また以前のように植物に制裁を加えたり駄犬を打擲したりできるはずであった。しかし、老人の努力の甲斐もなく、日を重ねることに腰の痛みは増す一方であった。ある日、老人はたまりかねて、医師の往診を仰いだ。

老人を診察した医師は、眉間にしわを寄せたまま、無茶はいけませんと云った。そして無情にも安静を云い渡した。さもなくば手押し車で歩きなさいと云い残して帰った。

頑健のうえに立脚した強気だけを取り柄にしてきた老人にとって、足腰が立たないということは、ある意味生きていく後ろ盾をなくしたに等しかった。老人は負けん気は強いものの、実のところ病に対する恐怖は人並みにあった。常から朝起きして木刀を振り回しているのも、畢竟、虚弱で死ぬることを恐れるあまりに違いなかった。だから老人は、医師から寝たきりになってもよければ好きなように歩き回るのがいいと脅されたとき、怖気づいて少々気が塞いだ。さりとて男やもめのことゆえ、買物に出なければ飢えるばかりであった。

そついう訳合から、老人は不恰好を承知で手ごろな押し車を購入した。医師の指示におとなしく従うことには些か以上の抵抗があった。

たが、ほかに妙案も珍案もなかった。老人は車を押しながら、毎日のように家の前の道を行ったり来たりした。そうすることは、——いや、そうしている姿を見られることは、元来「衣は髻に至り袖腕に至る」という頼山陽の謡を愛吟し、自ら剛健の氣風をもつて任ずる老人にとつては耐えがたい屈辱であつた。なにやら町中の住人たちが、そろつて窓の内から息をひそめたまま、様子を眺めているような氣さえした。

木枯らしが薄窓を叩くある晩、老人は寢床の中でひとつ大きな噓をした拍子に粗相をした。そのとき初めて、彼は死んだ妻の顔を思い浮かべた。彼はこのまま腰がきかなくなつて来るべき日が来ることを恐れた。せめて出奔した長男でも戻ればと思つた。

しかし、ちょうどその数日の後、勘当されて家を出ていた次男が近々家に戻りたいと手紙を寄こしてきたとき、偶然とはいえ上手い頃合であつたのに老人はこれを許さなかつた。次男の手紙には、家を出てからしばらくカフエーの給仕をしていたが、ある人の周旋で貿易会社の勤め口を得てからは、世間にも顔の立つようになった、そろそろ実家の敷居を跨がせてほしい、というようなことが細々（こまごま）と並べられていた。実家に戻ったら嫁に迎えたい人を紹介する、きつと父さんにも氣に入ってもらえる、とも書いてあつた。「女々しいやつだ」と老人はつぶやいた。つぶやいたついでに、細かい字の並んだ便箋を苦もなく破り捨てた。

「どうせ家賃を浮かせようという腹だ」

そしてつい今しがたまで家族の誰かがいてくれたらと願っていた自身の生ぬるい心持ちを少々苦々しく思つた。いったい老人は、この次男を子供の頃から好いていなかった。老人は何かにつけて次男を長男と対比した。

長男の寡黙は武士道に通じるところがある、と老人は勝手な解釈を与えていた。長男の多くを云わぬ態度のうちには、子供ながら悠然たる氣風と何事にも動じない胆力が備わっていると見えた。それ

に比べて、次男には何をさせても氣骨に欠け、まるで芯のないその場のぎを云つては周囲の顔色をうかがうようなところがあった。それは老人に云わせると、狡猾で肝が据わっていない証拠であった。また、長男は学業に対して地道な努力を絶やさぬ男だった。しかるに次男は、絵を描いたり散文を書いたりすることにはいやに秀でているくせに、一向に努力をせぬ男で、勤勉などという言葉とはおよそ無縁であつた。

だから老人は長男が中学で勉強をよしてしまつたことに不満を持つていた。あるいは次男が大学まで進んだことに腹が立つたと云つても良い。老人は、長男が家計を慮つて次男に進学の道を譲つたのではないかというように邪推した。だがそれは實際あたつてはいなかつた。長男は老人が買いかぶるほど勉強ができた訳ではなく、成績はいつも下から数えたほうが早かつた。

「しかし」と老人は思った。「あやつはどういう料簡で出て行つたのか」

それは長男が家を出てからというもの、心の底から繰り返し湧いてくる疑問であつたが、いくら考えたところで判らないものは判らなかつた。

世間ではそろそろ正月の準備に慌しくなる年の瀬のいち日、老人とて例外ではなく、独り者のくせにいやに慌しかつた。少々曲がつてきた腰に鞭打つて、煤をはらう、庭を掃く、門を清める、癩症であるからひととりのことはやらねば気がすまなかつた。しかし、腰を傷めてからは、従前ほど己のからだが思うようにならないことに、まったく気づいていないわけではなかつた。

「こういう時に限つて、SもKも手伝いに来ないではないか」

老人はそう思ひはじめると、同じ独り言が何度も口をついて出るほど憤慨した。後輩のSやKは、いつも呼びつけられて仕方なく来るのだということに、彼は気づいていなかった。彼は思い立ったらこらえ性のない性質であつたから、Sに宛てて長々と無音を責める

手紙を書いた。しかしその手紙は、ちよつとした行き違いでSの手には渡らなかつた。Sはその頃、海外視察をする市長に同行して独逸にいた。老人の出した手紙はちよつとSの家に来たばかりの新参の手伝い人によつて、誤つて処分されていた。だから老人がいくら待つても、Sからの返答があるはずはなかつた。老人は仕方なく、いつものように押し車で歳末の買出しにでかけるしかなかつた。

老人はSの非礼に怒りながら買い物をし、怒りながら帰路についた。家の傍のちよつとした坂道は、そのとき、折からの雪時雨に北風が吹きつけて凍つていた。うかつなことに、ちよつとそこを重い荷を乗せた不安定な押し車でとおつたものだから、老人は車もろともあつという拍子に転倒してしまつた。彼は傷めている腰をまたしたたか打ち、しばらくはうんもすんも云えず立ち上がることができなかつた。

そこへうまい具合に、学校で催された餅つき大会を終えたばかりの女児が二人通りかかつた。女児らは老人の様子を見るとひとしく駆け寄り、ひとりには老人の手を引いて起こしてやつた。もうひとりは押し車を起こして、散乱している荷のひとつひとつを拾い集めにかかつた。

「怪我はなくて？」

ひとりの女児がそう云つて、小さななりで老人のからだを支えてやつと引き起こした。凍つていたために泥こそあまりつかなかつたが、老人のインバネスの尻に一つの小さな綻びができた。

もう一方の女児は、地べたに転がつた芋やら牛蒡やら葱やらといった荷を集めていた。荷は坂のちよつとした傾きに対して、いやに遠くまで転がつていた。彼女はそれらの荷をいちいち拾つては懷に抱えて、立て直した押し車に載せていた。ところが、卵の入つていた紙袋をみつけてこわごわ覗きこんだときに、彼女は「まあ」と声をあげた。袋からは割れた鶏卵の汁が垂れ、糸を引いた。

女児はしばらく困惑の体であつたが、思い出したように自分の持つていた手ぬぐいを押し車のうえに広げると、割れてないものだけ

を選別して、丁寧に汁を拭つてはそこへ乗せた。鶏卵の汁はどうかすると彼女のあかぎれのした小さな手にまわりつき、手ぬぐいで拭いても寒空の下では見るからに冷たそうであった。

「だいじょうぶなものが、まだ三つ四つはあるわ」と云いながら、彼女は割れていないほうの鶏卵を手ぬぐいで軽く包んだ。そうして彼女は何を思つたか、袂に入れていた今ついてきたばかりの餅を二つ、ひよいとそのうえへ乗せた。それらは彼女のなりに相応して、いかにも小ぶりにちんまりと手ぬぐいの上へ鎮座した。

「これあげます」と、女兒は無邪氣そうな頬を北風に赤く染めて、老人を見あげた。

老人は礼も云わずに、しばらくのあいだ彼女らの所作を他人事のように眺めていたが、不意に、——子供のころ以来何十年かぶりに両の目から大きな涙の粒をこぼした。そして彼は顔を手で覆つたまま、今起こしてもらつた地べたに、また座り込んでしまった。

二つの餅が老人にどういふ作用を及ぼしたのか、筆者は詳らかなところを知り得ない。ただ、女兒の赤い頬と小さな目は、老人の寒々しい心のひだを、刹那のうちに暖めるちからを持っていたに違ひなかつた。そして、他人の軟弱を嫌い、自らの軟化を恐れた老人が、澎湃と湧いてくる熱いもので頬べたを濡らしながら、思いのほか快い感傷のなかに浸っている自分をそこに発見したことも、また事実としてここに云い添えておかなければいけない。

× × ×

翌日、老人は穏やかな新年を迎えた。彼はなにやら自分自身が産湯を使っているときのような清しい心もちのうちに目覚め、粗末な芋の煮ころばしを満足そうに食つては杯をなめた。この芋は昨日子供が拾つてくれたものである。

彼はその日、次男にあてて初めての賀状をしたためた。そして酒の加減かどうか、妙に浮かれる筆のまま、左端に小さくこう書き加

えることを忘れなかった。

—— 老生、永らくの独居にて晩酌相手に事欠き候

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0253q/>

餅

2011年1月17日23時40分発行